

「平成 30 年度（2018 年度）卒業生アンケート」 大学教育への満足度および学修状況に関する項目の分析

筑波学院大学 IR 担当

調査の概要

筑波学院大学では、昨年度の卒業生を対象に「平成 30 年度卒業生アンケート」を実施している。調査項目は学生生活や経済支援に関する項目まで多岐にわたるが、本稿では卒業生の大学教育への満足度および 4 年間の学修状況に関する自己評価を分析し、これからの教育の改善に活用するものである。

実施時期：2019 年 3 月 12 日（卒業式）

調査対象：2018 年度 経営情報学部卒業生

調査方法：卒業生を対象とした全数調査，質問紙によるアンケート方式で実施

調査目的（アンケート教示文より）：

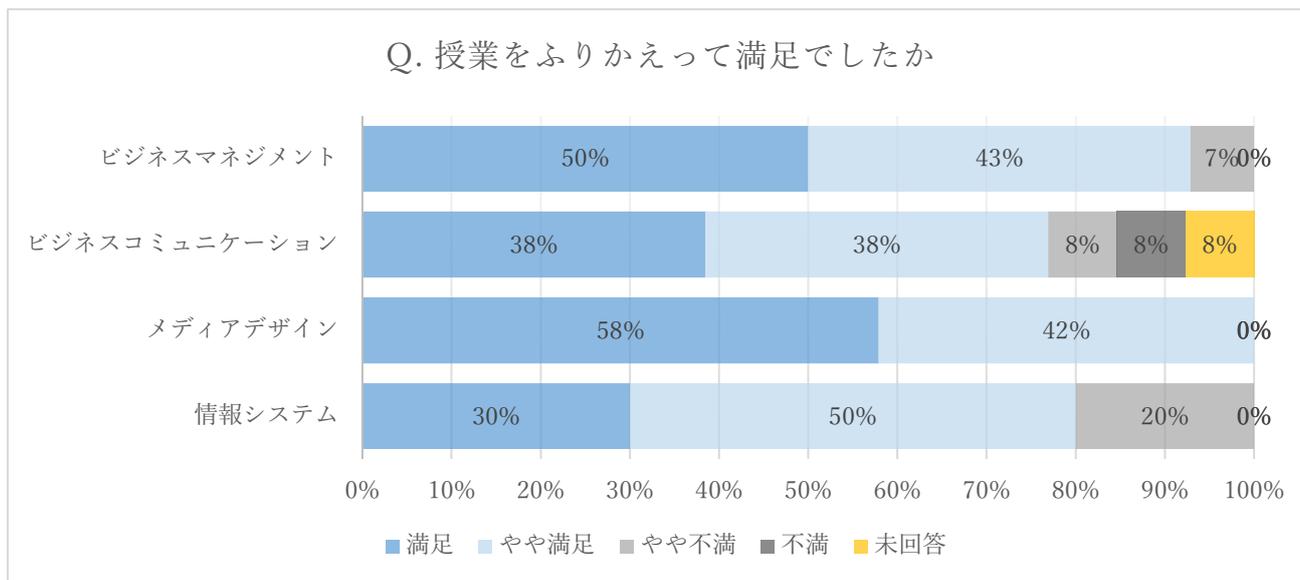
この調査は、本学がより良い教育の実現を目指すために行うものです。ご協力をお願いします。
該当する項目に○をつけてください。

なお、この調査は無記名で提出してください。本調査以外の目的で使用することはありません。

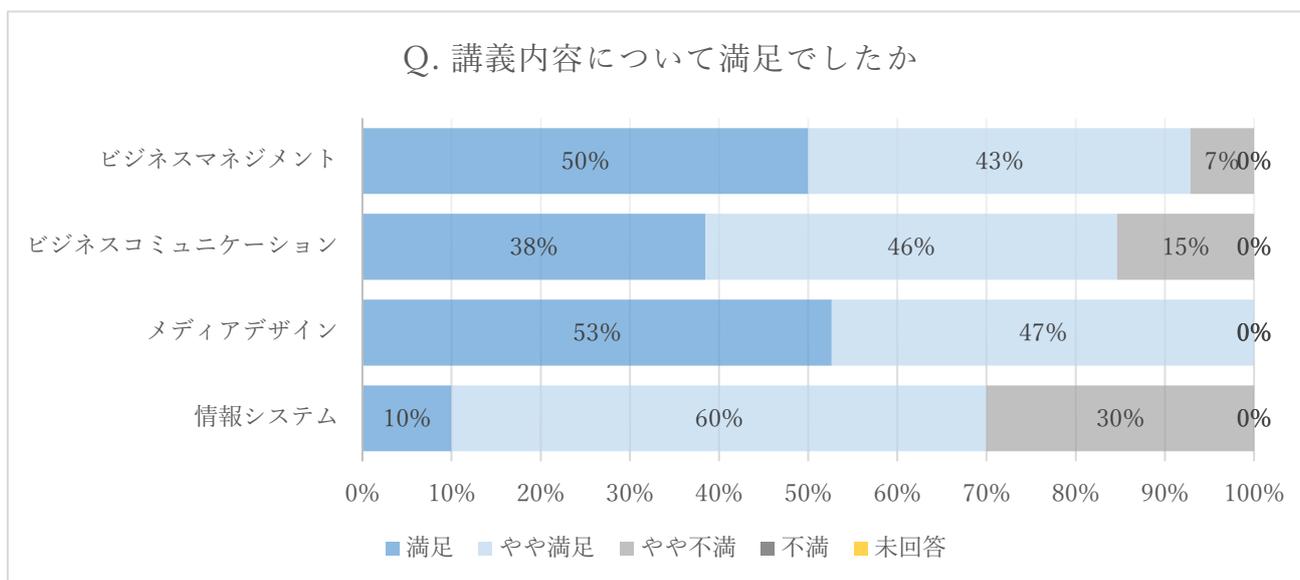
回答者数

専攻したコース	回答者数
ビジネスマネジメント	14 名
ビジネスコミュニケーション	13 名
メディアデザイン	19 名
情報システム	10 名
計	56 名

調査結果「大学教育への満足度」より

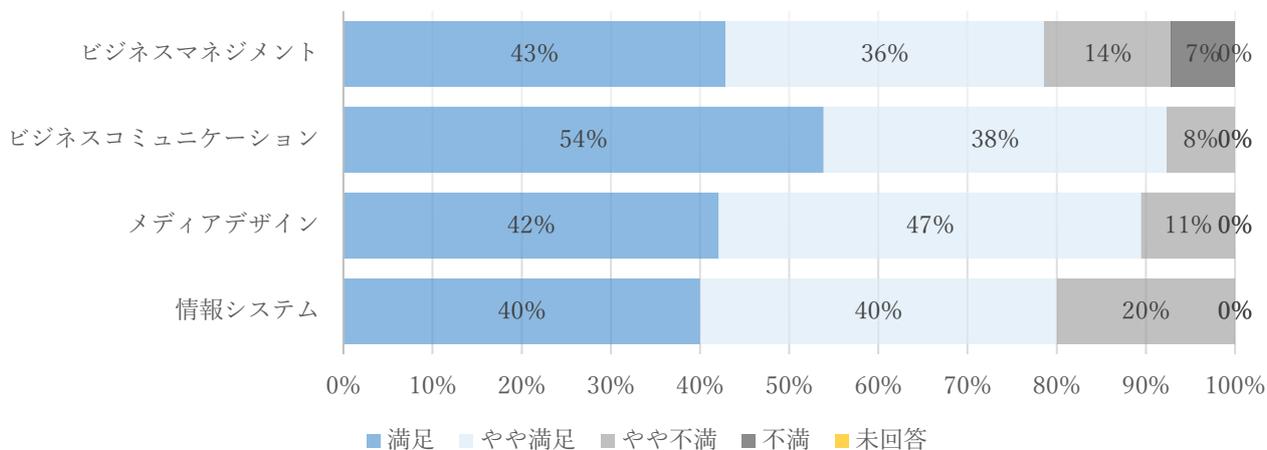


授業全体への評価は概ね肯定的なものとなっていた。一部「不満」の評価があるが、特定のコース科目に対する評価とは捉えず、慎重に精査することが望まれる。



講義内容への評価は概ね肯定的なものとなっていた。コースごとに比較すると、メディアデザインコースを専攻した学生の満足度は概ね高かったと言える。一方で情報システムコースを専攻した学生の満足度が低くなっている。これはコースで教授する科目内容に依拠するところが大きい。情報システムコースは基本的には演習室（PC 教室）を使った授業が多いため、コース科目に座学で講義を聴講するだけの授業が少ない。結果として、自分の主専攻したコース以外の講義形式の授業を履修することになり、もともと学生の動機づけが低かったとも推察される。一方でビジネスマネジメント、ビジネスコミュニケーション専攻の学生に一部満足度が低かったことは、慎重に検討すべきであろう。

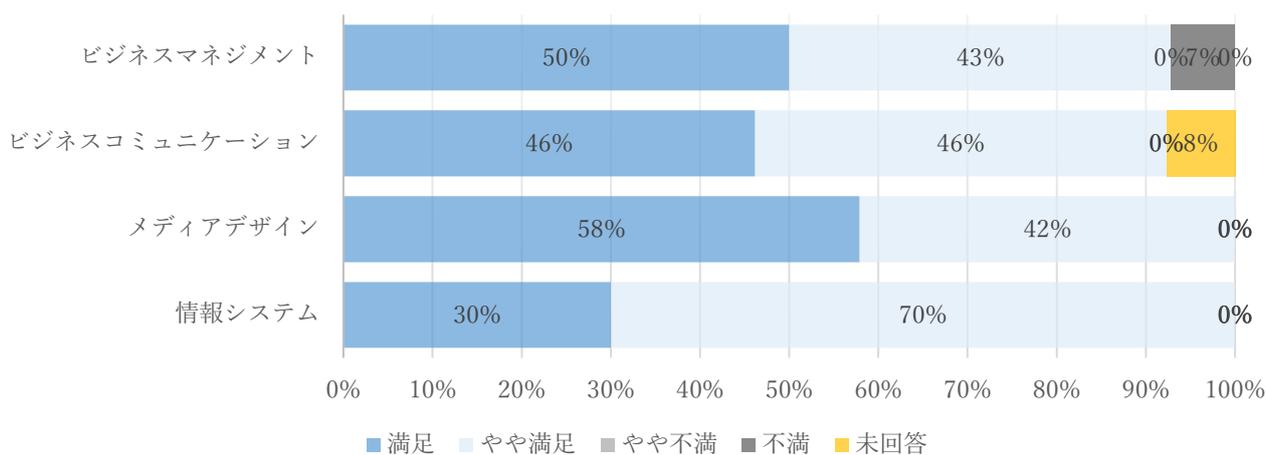
Q. 実習・演習科目,卒業研究などの授業内容について満足でしたか



実習・演習系科目の満足度については、前出の回答と比較して「やや満足」と「満足」の割合が異なり、コースに関わらず「満足」の割合が高い。情報システムコース専攻の学生は前出の講義科目への評価と比較し、演習科目には満足していることが伺える。一方で否定的な評価する学生も一部あり、演習・実習系授業への不満か、または特定の卒業研究の指導に関するものかは検証する必要がある（2018年度ビジネスマネジメントコースは、指導を希望していた卒業研究の担当教員の退職などで、不本意な指導を受けた可能性も否定できないであろう）。

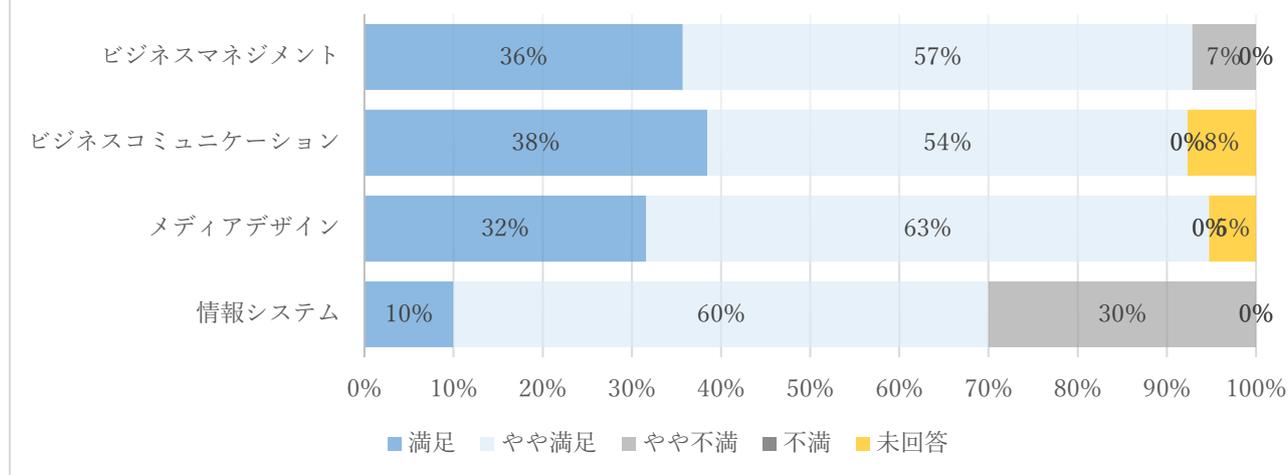
卒業研究の担当教員、および指導希望分野については、ミスマッチが生じないよう慎重な対応が求められる。

Q. 学習支援に関するサービスについて満足でしたか



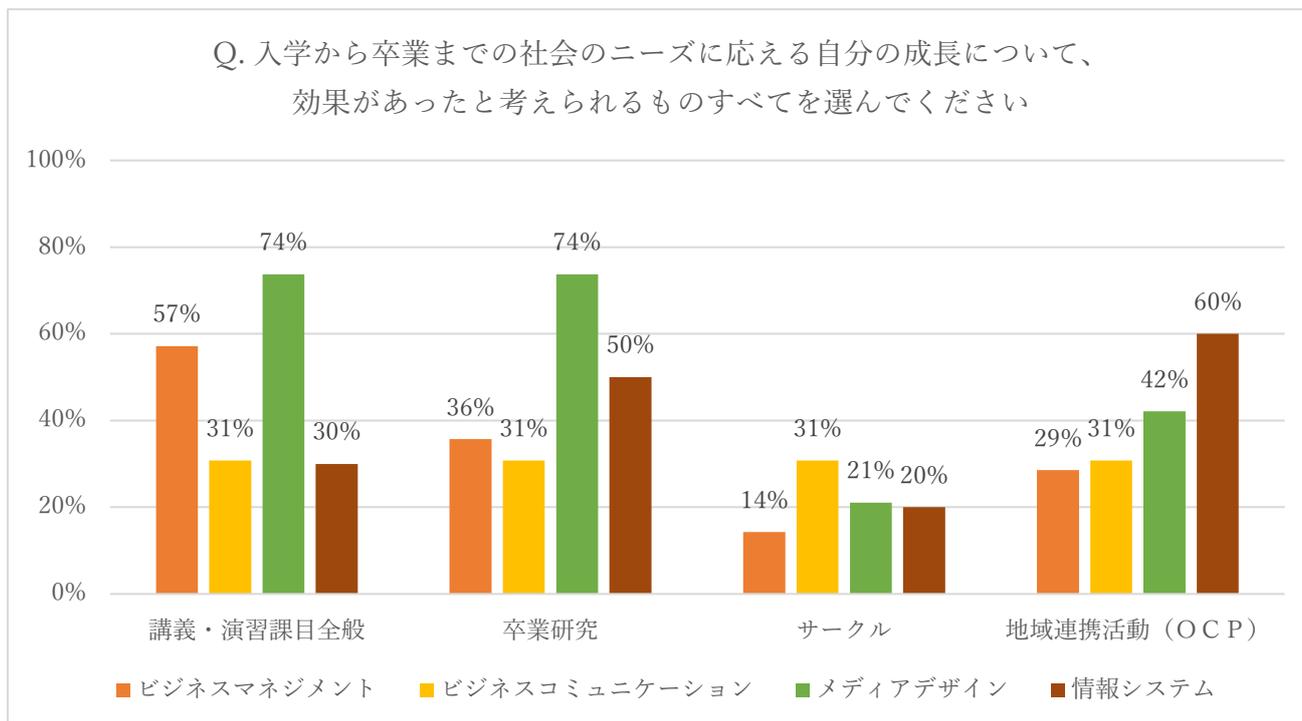
学習支援サービスについては、概ね肯定的な評価がされている。

Q. 資格取得講座の種類、内容および支援について満足でしたか



コース毎に比較すると、情報システムコースの資格取得支援への満足度が相対的に低いように見える。平成 29 年度の調査でも「やや不満」「不満」の回答があり（回答者の 12%）、支援の拡充が必要と考えられる。一方でメディアデザインコースの回答には不満はなかったものの、平成 29 年度の調査では「やや不満」「不満」の回答が多かった項目でもある（回答者の 33%）。本年度向けに支援体制を大幅に変更した点もないため、調査対象とした卒業生側の個別ニーズだった可能性も考えられる。これらを踏まえると、コース毎での対応ではなく、資格取得支援については全学的ニーズ調査から対応することが望まれる。

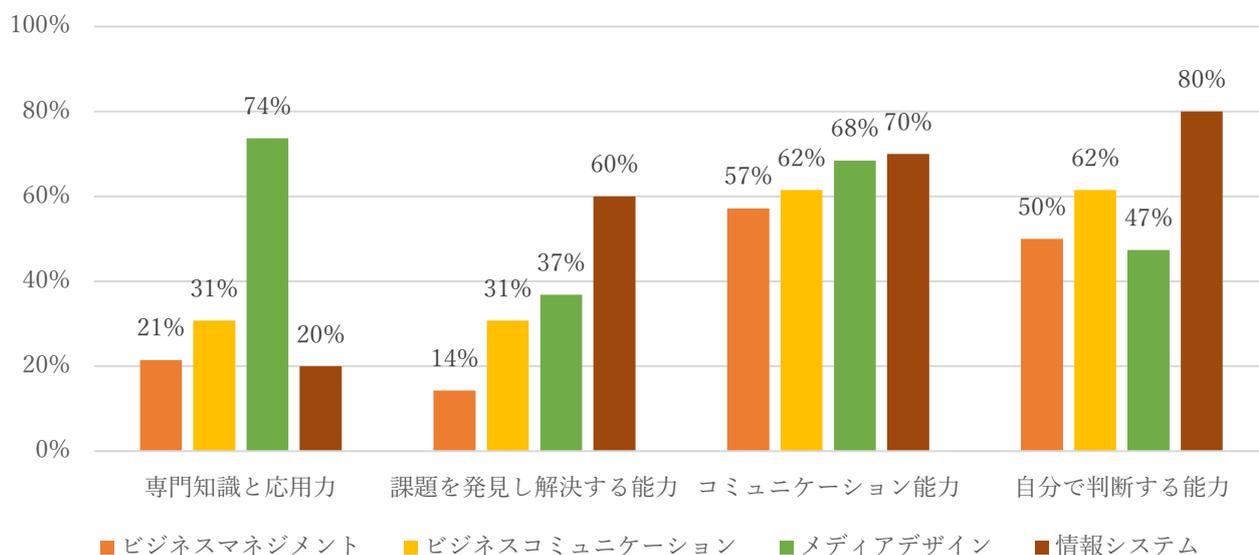
調査結果「学修状況への自己評価」より



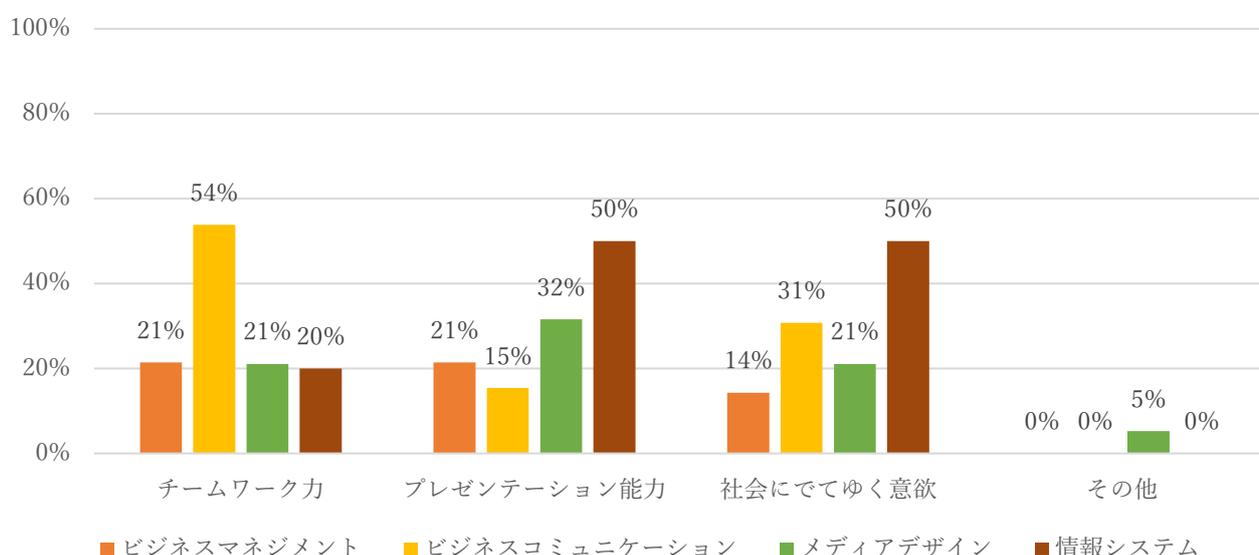
メディアデザインコース専攻の学生は他コースと比較して、専攻した分野での学習成果による成長を高く評価している傾向が伺える。一方で卒業研究については、ビジネスマネジメントコース、ビジネスコミュニケーションコース専攻の学生があまり社会のニーズに応える自己成長につながっていないように見える。ただし複数選択式の調査で、この2コースの学生は「効果があった」と選択した割合自体が低く、自己評価が厳しいパーソナリティが集まっていた可能性もあるため、慎重に検討すべきであろう。

全体としては、サークル活動のような学生の自主的な活動よりも、大学教育として提供したものの効果を高く捉えているといえる。

Q. 学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、
すべて選んでください (1)



Q. 学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、
すべて選んでください (2)



成長に関する自己評価では、専門知識と応用力の成長を高く認めたのはメディアデザインコース専攻の学生であった。また、課題発見や自己判断などの能力の成長を認めたのは情報システムコース専攻の学生であった。演習系の専門科目の多い両コースだが、メディアデザインコースが新しいソフトやメディアの活用を学ぶ場面が多いこと、情報システムコースでは（発展科目以降に）学生個人で課題解決する科目が多いことが反映されたと推察される。チームワーク力の成長を高く認めたのはビジネスコミュニケーションコース専攻の学生であった。これも専門科目の特徴が反映された結果と捉えられる。

調査項目全体を概観すると、他の項目と比較してコミュニケーション能力の向上はどのコースを専攻する学生も感じていたと捉えられる。これは本学のサービスラーニングの科目が1～2年必修であったことが影響しているであろう。

総括

本稿では卒業生の大学教育への満足度および4年間の学修状況に関する自己評価を分析した。4コースを専攻した卒業生の満足度や自己評価を相対的に分析したが、教育への満足度や自己成長がそのままコース科目と直結していると判断するのは避けるべきである。本学はコース制を設けてはいるが、すべてのコース科目の履修をできるよう設計されているため、自分の主専攻でなかったコースの科目の影響も大きい。また、調査人数がかなり少ない中での結果の解釈になるため、年度ごとのデータにもかなりのばらつきが認められる。よって、大学教育自体を見直す資料とするためには数年間の推移も調査した上で、慎重な判断をすることが求められる。

(2020.3.1 作成)